



## アーティストトーク 01

### 「配置・調整・周遊」

2018年12月23日 14:00-15:30

ゲスト

槻橋 修 (神戸大学准教授、ティーハウス建築設計事務所)

林 寿美 (アート・プロジェクト KOBE 2019:TRANS-ディレクター)

## 鑑賞者としてのダイバー 作品としての蟹

**槻橋** 私は神戸大学建築学科の准教授で、同時に神戸でティーハウス建築設計事務所を主宰しています。私の事務所が入っているデザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) に飯川さんもオフィスを構えていて、今日につながりました。

**林** これまで飯川さんのお名前と作品は存じ上げていましたが、この展示は今日初めて拝見して、とても楽しかったです。体験して「あれれ?」という感じがしました。まだ、この《デコレータークラブ》のコンセプトをきちんと理解できていなくて、とても腑に落ちる部分と、まだちょっと謎が残っている部分があります。

**飯川** デコレータークラブというのは、海にいる擬態する蟹の名前です。カモフラージュし、身を守るために、ひっそり生きている生き物です。最初テレビで見たのですが、ダイバーがデコレータークラブを見つけた時の感想が、蟹は擬態して身を隠そうとしているけれど、ダイバーにとっては、海の底で見つけた得体の知れないものであると話していました。デコレータークラブは世界中の海にどこにでもいるけど、もしかしたら、誰にも見つかることなく生きている蟹です。ですがダイバーが

見つけることによって、二者の関係が生まれ特別なものになっていると感じました。ここ15年ほど展覧会やアートプロジェクトをやっていますが、その特別な関係や出会いに興味があって、そのような作品を作りたいと思い、蟹とダイバーとの触れ合いというものを起点にして、いろいろな形を試しているところです。

**林** クラブ活動を連想しますが、蟹のクラブ (Crab) ですね。カメレオンみたいに行く先で変わっていくというよりは、それぞれの場所で自分の模様を身につけていく蟹なのですか?

**飯川** デコレータークラブの蟹を裸の状態しておく、数分後には近くの石などを身につけています。恥ずかしがり屋とも、装飾、派手好きの蟹とも言われています。僕たちが感じるのとは相違があって、蟹は身を隠すためにその場の物を身につけて生活しています。

**林** 飯川さんにとって、作品は蟹、ダイバーは鑑賞者として、互いに会おうというものに着目されているのですか?あるいは、ダイバーは鑑賞者ではないのですか?

**飯川** ダイバーは鑑賞者としてイメージしています。最初はデコレータークラブの蟹のような特別な雰囲気のある作品を作れたら面白いと考えていましたが、いろいろやっていく中で、観客が面白い





DECORATOR CRAB

のを見つけた時に、情報を第三者に伝えたいくなる気持ちや行為、関係性に着目するプロジェクトとしてやっていたこうと変わってきました。

**林** 槻橋さんは、今回の作品をどう感じられましたか？

**槻橋** 2種類の感想があって、ひとつは、建築家であるので、この空間的なインスタレーションが建築っぽくていいなと思いました。建築は美術より作ったものがいろんな風に見られ体験されます。ピースが動くことで、純粹に空間の体験ができると感じました。まず、階段を上がってきた時に「入口はどこですか？」と聞くと、受付のスタッフの方ににんまりされ「これ動くんですよ」と言われ、とても驚きましたね。(p.3) この入口にピースがあることで、あんなに奥まである公民館のバルコニーがリセットされ、タイトルにもある「周遊」する感

覚がすごく新鮮で。大きな現代美術作品なども体験したことがありますが、今回はある意味で参加型というか、アートに対していろいろな角度で体験することができました。これが《デコレータークラブ》の体験なのかと。もうひとつは、アートとしての表現をデコレータークラブの蟹はどこまで意図としてやっているのか、鑑賞者としてのダイバーにどこまでこの蟹の愛くるしさが伝わるのか、その過程における不安そのものが表現の主題なのかと思いました。以前の作品の記録写真では「空色の猫の小林さん」(pp.6-7)の全体像が木で隠れて見えなくて、その距離感が、展覧会のテーマとして掲げている感覚のかなと思っています。廊下には、映画のセットのように大きな立体があり、試行錯誤しながら体験が広がっていくのですが、観客に見えている部分から全体を想像させて



A-Lab の奥まで続く廊下。9mの青の構造物が道を塞いでいた。(p.63の模型参照)



room1

いく展示になっている。単に見るだけのアートとは違い、体験型ではあるけれど、考えさせられるタイプ。そこが面白い。

## ■違和感という視点から考える

**飯川** 入口から飛び出している構造物を見るとまず「すごい大きなものを作ったね」と感じると思うのですが、梶橋さんが言われたように、観客には考えながら歩き、作品を体感してもらいたいという思いがあります。大きな広い空間やアートスペースに美しく作品を展示したり、気持ち良い間を作って作品と鑑賞者の距離を構成して展示することは、作品展示の技術として必要だと思うのですが、《デコレータークラブ》の展示として意識しているのは、空間に対する違和感というものです。美術館

やギャラリーの展示はチラシやインターネットで情報を見て、あの作品がこんな風に展示しているのだろうと予測する。人を呼ぶ手法としては必要ですが、そのまま観客が想像できてしまうような展示をするのはもったいないと思っています。もちろん多くの人に作品を見に来てもらいたいのですが、《デコレータークラブ》に関しては、たとえ来場者数が少なくても良くて。鑑賞者が“衝動の伝達”や“伝えようとすることで欠落してしまう情報”について考える作品を制作していきたいと思っています。違和感のある大き過ぎる変な構造物を使うのは、今回の展示が初めてになります。大学を卒業した頃から、ある空間、部屋の中に気持ち悪いくらい大きなものがあつたら面白いんじゃないかなという漠然としたイメージはありました。当初はなぜ面白いかわかかっていなかったけれど、今



**HIGHLIGHTSCENE Goalkeeper - a few centimeters of positioning -**  
2015  
Medium: Multi-channel video installation  
20 mins loop

では違和感という視点からいろいろ考えることができる。今回も《デコレータークラブ》を皆さんに考えてもらいたくて、この展示になりました。

**林** 擬態する蟹は、今回は大きな構造物として建物を擬態しているのかと思いました。実際押してみると、押ししている間に自分にも擬態してくるような感覚、壁と一体になる感覚があります。どの壁も重いから体重をかけないと動かないし、こっちに近寄ってくる感覚もあって、飲み込まれる感じが強烈でもありました。目の前にある大きなもので先が見えず、その先にどのくらいの距離があるのか、どこに向かっていくのかわからず押していく感覚は、子供の頃に体験した大玉ころがしに似ていますね。最後の部屋にある模型で、構造の仕組みがスッキリしました。

**飯川** 今回の《デコレータークラブ》の壁は、建

築物を作っているイメージです。A-Lab を作っているみたいなイメージでしょうか？ A-Lab のもともある壁と同じくらいしっかりした壁を作っています。デコレータークラブのカモフラージュ、擬態とは直接は繋がってなくて、擬態することで発生する事象の一部とリンクしたらいいなと思っています。

**槻橋** 建築の立場で言うと、今回のアートの体験は、普通に体験する以上に空間の持っている良さが、元が公民館であった経緯も含めて、箱を押しながらリアルに見えてくる気がしました。この箱が何かの擬態であるよりは、押すことを体験することで、作品としての箱と、周りの空間とその間に、自分を感じる体験がありました。飯川さんのゴールキーパーの写真の作品は、複雑なコンセプトだと思っていて、見られていると見られない人がどうしているか？ 見ると見られるの関係



**DECORATORCRAB -Pink gallery-**

2016

Warehouse, Wood, fluorescent paint

Installation view: *DECORATORCRAB*, Shioya Project, Kobe, 2016

photo: Hyogo Mugyuda

が錯綜しています。一般的なアート作品と異なり飯川さんの作品は鑑賞しようと思った瞬間に別の関係が現れ、鞆がすごく重くて持てない作品とか、ある種ドッキリのようでもありますね。コミュニケーションを期待しているのですが、メッセージが乱反射するような体験がいっぱいあって、そういう関係の複雑さをデコレータークラブとダイバーとの関係の中に見られたのかなと思います。林さんに伺いたいのですが、複雑になった世の中で、現代美術はこのような作品があるのか教えていただけますか？

**林** 今の現代美術には実にさまざまなものがあります。飯川さんについては、作品を展示して「見て下さい」と言っているのですが、言っていないようにも思います。リュックは、壁止めの役割も果たしていると思うのですが、見てねと言ってないのを見て

ねと言っているような…… 不思議な立ち位置だなと思いました。でも鞆は壁止めが必要でないところにも置いてありますよね。

**飯川** 鞆は25キロあって触ってもいいのですが、それを言っていない。鑑賞者はroom2に展示している《ベリーヘビーバッグ10kgの記録映像》(p.54)を見るまでは、鞆が壁止めで作品とは思っていなかったり、誰かが置いていると思われるので、いきなり触ったりはしない。映像を見た方が、見たり触ったりはしますが、実際持ってみると、持つ前に考えているのを感じる重さは違うと思います。入口の前にも紫のリュックを置いていますが、あえて何も言わないようにしています。

**林** 美術館側からすれば「そこは説明して下さい、キャプションをつけて下さい」とお願いしたいのですが、それもあえてつけていないのですね。



room1

**飯川** 鑑賞者の7, 8割は気づいてくれますね。映像を見てから気づく人もいれば、壁を押すと動くことにも気づかない人もいます。入口で帰ったり、鑑賞者が試行錯誤したあと中に入れられないということもある意味で展覧会としてチャレンジなのかなと思いました。でも、さすがに帰ろうとしたら止めてくださいとスタッフには伝えてあります。鑑賞者が自分から部屋に入りたいとか鞆を持ってみたいという気持ちを優先したいと思っています。本当なら、鞆の重さに気付く映像も置きたくないぐらいでした。

## ■今、この時代、このタイミング

**林** 私たちは、指示を待つ癖がついているのかもしれません。青い壁を押したら固くて動かなかったのですが、ふと横を見ると、火災報知機に「押せ」と

書いてあって。人って視覚的な文字情報で指示がないと行動しないものだな、と思いました。

**槻橋** 物だけでなく、コミュニケーションそのものにも擬態の要素を感じました。入口の方の案内がすごく良くて、「いらっやいませ。入口はこちらです」と言われるのですが、見当たらず「どこだ?」と思いました。展覧会で何かさせられるものはこれまでもあるのですが、それとは違いちょっとやわらかく感じます。壁を押した瞬間に、《デコレータークラブ》の世界に入った感じがあって、その瞬間、決壊を越えた気がしてすごく良かったと思いました。展覧会や美術館の順路を考えたときに、シークエンスがすごく大事です。この世界の入口は、すごくいい表現だと感じました (p.4)。飯川さん独特の見せたいような、そうでないような部分は、インスタレーション的に扱っていきま





**Decoratorcrab - Mr. Kobayashi, the Blue Cat -**  
Wood, fluorescent paint  
850 x 1,100 cm  
Installation view: UMINAKA TAIYOSO AIR, Taiyoso, 2017

くっているとしました。

**林** 体験型のアートはたくさんありますが、例えば、フェリックス・ゴンザレス＝トレスの部屋の片隅にキャンディを高く積み上げる作品は、観客がキャンディを持ち帰ることで拡散され、多くの人間でシェアされてアートが成立するというコンセプトです。ただ、本人が亡くなり、今や高価な作品として美術館で展示されると、監視の人が「(キャンディを) 取っていてもいいですよ」と声をかけています。観客は、言われるから取る。この展示も、この場所だから成立するのですね。美術館で、監視の方が声をかけることについてはどう思われますか？

**飯川** 監視の方が声をかけることも含めて作品として構成できればいいと思います。この作品の場合は想像し、考えてもらうことが一番重要なので工夫が必要です。A-Lab だからできるのかなと思

うこともたくさんありました。打ち合わせの時は、スケッチの提案でしたが「危ないけどやりましよう！」ということで、今回は、ルールや制約を減らして実現できました。早くたくさんの人に見て欲しいです。

**槻橋** 有名なマルセル・デュシャンの《泉》という作品（便器）が持ち込まれた時に、美術界で人を呼ぶということで巡回していくわけですが、今回の作品で伝わる情報量は、見せる度によっていくのかな？ 有名絵画や、彫刻が巡回しても、そのもののなかに価値があるのだけども。私は林さんに、現代美術において変わらないものがありますが、変わっていくものをどういう風に捉えているのかを伺いたいです。

**林** それは、見る側も作る側もそうですが、人間そのものが変わっているからだと思います。そう



room3 の扉は廊下にある青色の構造物によって塞がれていた。(室内からの撮影)

いう意味では、モネの《睡蓮》やゴッホの《ひまわり》も、変わっていくものなのです。晩年の《睡蓮》が発表された当時には、花も花びらも描かれていない粗っぽいタッチしか見えない画面なのに「睡蓮」と言われてもなあと皆感じていたと思います。ところが時代が変わって、人々がモネのヴィジョンに近づき、「睡蓮」だと感じられるようになった。飯川さんは、「ここでしかできない」と言われていましたが、それは社会の問題で、その中には人間も含まれています。今、私たちが体験できるのは幸せなことですが、50年後、ここで同じように体験をしたら、全然違うのではないかなと思います。

**槻橋** 例えば、飯川さんが大きな美術館で個展をすることになったら、そこでできることをいろいろ考えると思うのですが、アート作品を介しての作家と鑑賞者のコミュニケーション、作品の中にその

情報を加えたいと思っているわけですよね。《猫の小林さん》(p.50)が、将来モネの《睡蓮》みたいに巡回されるようになったときにどう考えますか？

**飯川** 巡回されるようになればいいなと思いますが、「今、この時代、このタイミングで」という作品なんです。《猫の小林さん》は、展覧会を見に来た時に、巨大な猫がいて、かわいいけど全貌が撮れなくてSNSにうまくシェアできないという、今の流行を利用した作品になります。いろんなところで、この作品は消費されたいと思っています。

**槻橋** アートでも、クイックに消費されるものと、長く続くものがあるだろうと思います。《デコレータークラブ》という作品テーマは、早く消費されるものではないと思います。

**飯川** 擬態する蟹が面白いよねという説明もできるのです。そうではなく、この蟹を見つけた時の



*HIGHLIGHTSCENE Goolkeeper - afewcentimetersofpositioning -*  
2015  
Medium: Multi-channel video installation, 20 mins loop  
Installation view: *HIGHLIGHTSCENE*, KOGANECHO Site-A Gallery, Yokohama, 2015

面白い感覚を、他の人にも同じように体験してもらうのは難しいことで、特別な体験を誰かに伝えたい衝動の部分、この感覚を小学生に話しても、認知科学を研究している人に話しても共有できる部分が多いし、《デコレータークラブ》はいろんな形や国で展開できるのでは?と考えています。

**槻橋** テーマとしているものの背景は、作家によって違うと思うのですが、飯川さんのコンセプトは、とても深く、広がりがあると思います。扱っているテーマが難しいこともあって、今回の展覧会も《デコレータークラブ》の布教活動の一つでもあるのかなと思います。飯川さんの世界は、ゴールキーパーの作品からよくわかると思いますが、関係性がわかった瞬間に理解される。世の中に、余白があり周縁的なものが美しく存在していることを証明する取り組みだと思います。